終戦直前、直後の北支戦線

●成田東三丁目
細井　和夫
（大正二年生まれ）

青島にて現地召集を受け、昭和二〇年六月三〇日、開封の北支派遣敏部隊へ入隊する。召集を受けた者は、北支在留邦人のほとんど全員らしい。

当時、当地には軍装も兵器もなく、ただ中国軍の銃を支給され、着用の国民服に持参のリュックサック、編上げ靴の民間人の姿にて原隊へ出発した。この中国軍の銃は銃身がすこし湾曲し発砲不能、床尾板（しょうびばん）には中国語にて『この銃を持ちだした者は死刑に処す』と、大きな焼印が押してあった。「かがしの兵隊」という話を聞いたことがあるが、自分はまさにかがしの兵隊なりとガッカリした。

鄭州駅より京漢線を南進し許昌駅下車、徒歩にて西南へ五〇キロ、河南省の壌城の原隊へ七月三日到着する。当地方は、中国人が至極のんびりと農作業に従事し、戦争我関せずとの態度が印象的で、戦線の第一線なりと予想したきびしさはことさらに感じなかった。

戦場なりと、感じたことは、軍事訓練中に米軍機P38が一機のみ高々度を通過し、上官が鋭い声で、「その場に伏せ！」と命令し、全員が一瞬の内に地に伏したことが一回あった。これが唯一の戦場の思いでなり。

八月上旬上官の命令にて、市内の商店へ通訳のため同行したとき、偶然にも中国人から、ソビエト軍が満州へ大挙進軍したらしいとの情報をきく。ソビエトとは不戦条約があるはずだ、そんなことがあるわけがない！と、自分の耳を疑う。隊内では新兵の我々にこんな重大なニュースが耳にはいるはずはないが、真実なら大変だ、これはいよいよ生きて帰国できないのではないか？と、いやな予感が頭をかすめる。

壌城駐屯中の我々が、終戦を聞いたのは八月一八日であった。部隊長より終戦をきくと、勝った負けたということより、これで生きて帰国できるという「ほっ」とした、複雑な心境であった。我々下級兵士にはなんの説明もなく、なにが何だか不明のまま現地召集者のみ全員開封へ引上げた。

当地にても終戦のいきさつ、今後に対する指示もなく不安な日々をおくること半月、九月一七日、突然兵器を返還し現地にて召集解除となり、全く残念な結果にて、二か月半の軍

隊生活に終わりをつげる。

帰心矢のごとく、早速青島、済南出身者一二名で一グループを組み貨物列車にて出発、一刻も早く帰りたい一心で、大黄河や中原の風物は目にもとまらず、九月一九日徐州へ到着する。

当地も、市内はなんら変わりはなく平静な状況であったが、当時すでに国府軍と共産軍の内線が胎動し、北進する津浦線の鉄道線路を、共産軍が撤去したため進行できず、奥地からの日本人引上げ者一〇〇名とともに、約二〇日間貨車のなかで宿泊することになる。

当地駅は、日本軍が警備につき治安を維持していたため、なんら不安はない。我々の行動の諸経費は、幸いにも現地在住者のため、状況を想像し、各自金品にかえるべく物品（時計、宝石）を持参しており、心配は更になかった。しかし鉄道が開通不明のため前進は不可能なり、先を急ぐわれわれは気持ちがあせり、心は動揺し全員真に悩む。

慎重に検討のうえ、一〇月九日意を決し、困難を覚悟のうえで徒歩にて出発。中国人を一人雇い、一輪車の荷車に荷物をつみこみ、約一〇〇キロ臨場まで前進する。ここからは荷物を半減し、各自がリュックサックを背負い、共産軍と国府軍の戦闘の間を縫っての前進となる。一望千里の大平原を雨が降っても又晴れても蟻のごとく北進、ただ歩くのみ。交戦地域をさけて、南沙河、杭州等、状況次第で避難の逗留（とうりゅう）をしたり、また二、三日歩く等など、これが在支期間中一番苦しい日々であった。汽車なら八時間の行程を四三日を要し、済南にどうやら到着する。

一一月二三日済南からは汽車にて出発するも、またまた状況危険のため龍山から徒歩行進となる。この山東半島は共産軍の拠点とか状況不明、三日前進しては引返すなどを繰返し、一二月一〇日夕刻青島に無事到着した。これまた汽車ならば四時間の行程を一八日間も要した悪夢のひとこまなり。

しかしこの苦しい体験は、自分の終世の鞭として、肝に銘じ心に誓う。

開封にて現地除隊以来青島到着まで約三か月の行動は、苦労は多かったが、身に危険を感じたことはさしてなく、この間中国人が、むしろ好意をもって接してくれたようにも思われ、不思議とさえ感じたものだ。

この点、後日聞いたことながら、中国軍総司令官が「怨みに報いるに、徳を以てす」という布告を全軍に出し、日本人に対し好意ある人道的処置を指示された由によるらしく、強烈な感動を受けたしだいなり。

梅雨前線

●井草二丁目
松﨑　卓一
（明治四一年生まれ）

いつも梅雨の季節になると、南の洋上に梅雨前線が現れる。これを見るにつけ私の脳裏に浮んでくるものは、あの悲惨な出来事である。

今からちょうど四八年前の昭和一九年六月一七日、土曜日のことである。翌日曜日の休日のプランを心に描きながら神田ＹＭＣＡにある海軍気象部（海軍水路部から独立した特設部隊）に出勤したところ、課長がお呼びとのことで急いで課長室に出頭すると、課長の様子がただごとでない。これは極秘だがと前おきして、『実は今朝サイパン島に米軍が上陸を開始した。すまないが直ちに横須賀海軍航空隊に行ってくれ』、との命令をうけた。そこでその足で横須賀に直行した。もちろん家族に通知する余裕のあろうはずはなく、途中の電車のなかで、これは大変なことになったなと思いつづけた。

当時の横空は内地で最も訓練された航空隊の一つで、この部隊を中心に各航空隊の精鋭部隊を集め、その名も八幡部隊という特設部隊を編成中であった。同部隊の先任参謀の説明によれば、当面の任務はサイパン島をとりまく敵艦隊を爆撃することであり、更にかの我が航空艦隊の海戦時での側面からの支援であるが、ともかく援護用の戦闘機を一刻も早く硫黄島基地へ送ることであった。私がその天気予報を担当することとなった。

そこで天気図を描いてみると、八丈島と鳥島間に梅雨前線が東西に横たわり、この線上に低気圧が次々と発生して東に移動する気圧配置である。その旨を参謀に説明すると、この前線はいつ解消して天気が回復するかとの質問であったが、ちょうど梅雨期でもあり、この種の型は持続性が強いので数日間は解消の見込なしと話したところ、それでは間に合わないと直ちに戦闘機部隊の出動となった。

しかしどうしたことか、数時間後には全機が帰還し、一機も硫黄島にとどかなかった。聞くと、この前線は予想以上に発達しており、下は海面上五〇メートルから上は高さ七〇〇〇～八〇〇〇メートルまで、まっ黒い雲の壁となっていたため、どうしてもこれを突破することができず、やむなく帰還したとの報告であった。

翌日もその翌日も全く同じような気圧配置で、一方戦闘機は出発しては引き返すことを繰り返すだけで、一機も硫黄島に進出できなかった。参謀間では、これらの戦闘機の輸送の方法が論議の焦点となり、横浜航空隊の大艇で誘導する方法とか、軍艦で輸送する方法とか、あるいは特設空母で前線を越えてから発艦空輸する方法とかが真剣に検討されているうち、一九日マリアナ沖海戦が開始されたのである。刻々と入電してくる報告によれば、はじめは一進一退の戦況も次第に我が方に利あらずと判断されたのか、参謀の顔に明るさが消えさり、その結果を聞くこともなく、もとの静けさに戻ってしまった。

しかし皮肉にも天気は次第に回復に向かい、前線の弱まるにつれて戦闘機の空輸も活発となり、時折、サイパン島の敵上陸部隊への爆撃が開始されたが、一方硫黄島が敵艦隊の砲撃の目標となり、後日硫黄島での死闘の幕は既にこの時から切っておとされたのである。その後マリアナ方面の各離島での苦闘、死闘、次いで玉砕の情報が入電してくる。特にテニアン島からは、我が軍の将兵の士気はきわめて旺盛であるが、敵の物量並びに機械力には抗するすべもないとの電報を最後に、全員が玉砕されたのであった。これらの電報を見て何か日本の将来を予見しているかに思われ、どうして日本は国の総力をあげてサイパン方面の援助に向かわないのかの疑問が生じたのも、この時のことであった。

七月になると、この特設部隊が第三航空艦隊に編成替えとなった。その基地も木更津航空隊と定められ、その前進基地として急きょ硫黄島が強化され、本土直接防衛の第一線となった。その硫黄島があのような修羅のちまたと化し、やがて日本軍の無条件降伏となったのである。米軍がこの梅雨前線についてどこまで調査研究したかは別として、この梅雨前線がこのように戦況を支配するような結果になったのをみて、あらためて自然の偉大さを痛感する次第である。

アルバム「満州駐箚記念」より

〈提供　菊池正芳さん〉

戦時下の回想

●高円寺南二丁目
村越　尊詮
（大正一二年生まれ）

昭和一二年の日中戦争勃発の時は、私は中学二年であった。当時は東京の下町に住んでいたが、家が貧しく兄姉四人のうち末っ子の私だけが辛うじて中学校に通い得たのであった。月七円五〇銭の授業料その他がほとんど期日までに納められなかった私にとって、一つの辛い思いは「慰問袋」だった。戦地の兵隊さんに送る「慰問袋」は、学校からの指示で年一、二回作らされたのだったろうか。手紙と日用品や缶入りのドロップなどを入れるわけだが、手紙以外は皆新しく買って揃えるので、それを手内職で家計を補っていた母親に言い出すのが、なんとなく気づまりだったものだ。

そのころ、長兄と次兄（後年戦死と戦病死）は、近くの小学校に設置されていた「青年学校」へ夜間カーキ色の服を着て通っていたが、私の場合も中学四年ぐらいになると学校で中隊教練が始まり、また、年二回ほど配属将校に引率されて、富士山麓や習志野での野営演習に参加するようになった。どこの廠舎（しょうしゃ）も寝具などなんとも不潔、食事も粗末で不衛生なものであったが、そういう体験を経ていたからこそ、後にみな軍隊に入ってもなんとか勤まったのではないかと思わされる。

太平洋戦争の勃発は、中学を卒業して浪人生活を一年間している時だった。当時、我が家は北多摩郡国分寺町のはずれにあり、周囲はまだほとんど畠であった。一二月八日の朝は霜が一面におりた畠の一帯を欣喜雀躍（きんきじゃくやく）して走り回ったことを覚えている。文化勲章受章クラスの高名な人士からして「積年の暗雲が一気に晴れたる思い」と開戦を謳歌する風潮であったから、一八歳の青年が「感激措（お）く能（あた）はず」と日記にしたためるぐらいは当然なことであった。

そして私は昭和一八年秋、二〇歳で徴兵検査を受けて第一乙種となり、世田谷三宿の東部七二部隊への入営命令書を受けたのだが、教員養成学校（東京高師）在学のため、入営延期措置がとられたのである。

やがて戦争末期、戦況がいよいよ苛烈となってこの特典も廃止となり、昭和二〇年五月、習志野の東部九一部隊（野戦重砲兵）に入隊した。陸軍特別甲種幹部候補生いわゆる特甲

幹で、即日、伍長の階級章はついたものの、上等兵や一等兵などのいない兵営で、本物の伍長や軍曹に「オレたちは四年も五年もかかってやっとこさなったのに、オマエたちはなんだ。コノヤロウ！」というわけで、猛烈にしごかれたのである。

たしか四日目あたりの夜、区隊付将校が「まだ入隊後殴られていない者がおるか」と点呼整列の区隊員（約三〇名）全員に問いかけた。三・四人の者が（内心誉められるのではないかと思いつつ）正直に手を挙げた。ところがである。将校いわく、「オマエたちはこの帝国陸軍に入隊して三日もたつのにまだ一度も殴られたことがないのか、よし！それなら今日は本官が徹底的に殴ってやる」といいざま、一人ひとりが数メートルも後退する程の往復ビンタを連続して浴びせたのである。まさに緊迫せいそうの数分間であった。今にして思うと、殴るほうも恐らく手の甲が真っ赤に腫れ、相当なダメージであったろうが、将校としての気合というか矜持からあえて行ったのであろう。軍隊という所は要するにそういう所で、理屈もなにもあったものではなく、こうしたすさまじい環境のもとでしだいに「死」を恐れない図太い神経が涵養されていくのであった。

六月中旬、全員が習志野から前橋陸軍予備士官学校へ転属することになったが、こうした場合も到着までどこへ配属となるのか一切示達はなかった。夜間だったがむろん列車の窓は遮へいされており、我々は床に耳をつけ、転轍器（ポイント）の音で岡崎か仙台か前橋かを秘かに予測し合ったものである。軍当局はそれくらい防諜に神経過敏であったわけで、およそ現代の若い者には想像すらつかないことだろう。

ところでよくしたもので、そういう軍隊に適合する人材も当然存在した。体格が良く、目・耳などの器官がすぐれ、おまけに俊敏とくれば申し分ない。そういうのが区隊長（中尉）の命令で一週間ごとに学校でいう級長みたいな役を勤めたのである。私はとてもそんな柄ではなかったし、幸か不幸か、その順番が回ってこないうちに、八月一五日の敗戦の日を迎えた。

炎天下、食物の粗悪さから下痢患者がとみに増え、また、虱の大量発生や夜間空襲による睡眠不足が続き、はては練兵休（訓練免除休養）が何人か出始めるという前途暗たんたる情況の折りであった。こんなことは外地の前線で敵と死闘を繰り広げていた帝国陸海軍の将兵からすれば、何とも微温的で、コップの中の嵐と一笑に付されよう。だが当時の私にとっては、人間の極限の生活というつきつめた思いにかられ、徐々に「死」を覚悟せざるをえなかったのである。

我が戦争体験記

——台湾軍航空情報第四五七〇部隊にて——

●永福二丁目
湯原　豁
（大正六年生まれ）

まえがき

顧みれば、昭和一六年二月一日、杉並区永福より、現役兵として赤羽工兵連隊留守隊に一つ星で入営し、以後満州孫呉工兵第一連隊第三中隊編入、甲幹技術候補生から陸軍兵器学校、兵技少尉任官後、台湾軍に編入。命により陸軍第五研究所にて超短波兵器を専修し、台湾軍司令部に着任した時は、既に昭和一七年一一月一二日であった。以降、超短波兵器の陣地構築及び兵、下士官の訓練と同時に、高射砲部隊と連結して行動する航空情報第四五七〇部隊の主任兵器掛将校でした。防空と対空の熾烈な戦闘、だが無我夢中の叫喚のうちに、台湾沖航空戦、次いで台湾後方のフィリピンレイテ島沖海戦、続いて台湾前方の沖縄戦、そして原爆、敗戦です。以下に終生忘れ得ざる体験を三つに絞り、発表させて頂きます。

一　故H陸軍兵技曹長への弔詞

齢志学にして意気益々盛んなる時
君は自ら立って兵器宰領の大任を荷う
艨艟（もうどう）今波を蹴って過らんとす東シナ海
ああ、君遂に幽久として護国之鬼と化す。
船将に海没に瀕せんとするや、凜烈
君莞爾として独り断末の甲板に在り
絶叫人問へば答ふ「我兵器と運命を倶にせん」と
噫々誰乎亦何ヲカ謂ハん、壮烈唯鬼人を泣しむ耳。
時惟（こ）れ昭和一八年一一月二三日
黎明、未だ暗からん四時三〇分
あゝ、恨むべし東経一二二度〇七分
あゝ、悲しむべし北緯二八度四三分を。
朋友粛として今言葉なけれど
或は美しき南海の花束となり
或は黙々として雄鬼を祈念し
報国の丹心唯君に続かむのみ。

昭和一九年三月二日

陸軍兵技中尉　湯原豁

記—この弔詞は、我が親友H曹長戦死より百か日目に、小

生が作文し読み上げたもの。ただし、弔詞は全二八行であるが、要点を示すのみに止めた。

二　撃墜・米学徒兵の落下傘降下のこと

小生の本務は部隊本部（台北）の主任兵器掛将校であったが、正規士官の一時的不足のためか、短期間、台中の電探陣地の臨時小隊長を命ぜられた。レイテ島海戦前、昭和一九年秋ごろのことです。周期的に真昼時、米偵察機がいつも規定のコース（最南端のガランビから北上、高雄、台南、台中、台中以北）で飛来。電探情報で待機中の高射砲の激射と敵機の煙幕。その中から電探攪乱用の細い金属リボンがゆっくり降ってくる。毎回のことですがなかなか敵機に命中しません。ところが小生の短期滞在中、一機に命中して空中爆破。その時、垂れ込んだ煙幕の下から、落下傘がするすると小生の陣地に着地したのである。事件の発端である。

電探勤務者以外の兵、下士官の全員が銃と剣とで真剣そのものの構え。K軍曹は己の昭和新刀に手を掛けたがこれを制し、小生は隊長として情報第一主義を命令した。以下、隊長室で通訳などいませんので、小生が英語での米兵との尋問質疑の要点を述べる。

①彼はハーバード大・法科の学徒兵、学生結婚、赤ん坊一人（写真見せる）。〝早く医者（ドクター）を呼んで裂傷、火傷の手当をしてくれ〟と懇願する。手に「国際捕虜条約」（このようなことが書いてある手帳）の該当条項を指さしながら…。

②偵察は当方の周波数（陸軍は三〇MC）を察知、電波攪乱用金属リボンを適時散布しながら、当方の電波指向に乗ってくるから簡単という。

③彼は今回偵察の当番でなかったが、僚友の緊急病欠のため、テニスを止めて急遽そのまま機に乗った。だから白シャツとパンツ姿に落下傘を着けたが、まさか撃墜されるとは思わなかった、フィリピンのある島の飛行場（小生聴いたはずだが失念）から一時間以内といって顔を俯せた。

陣地内で応急手当をし、約三時間後に最寄りの憲兵隊に彼を引き渡した。生命の安全を願いながら。畢竟（ひっきょう）するに、国情、国際感覚の相違、特に当時は「戦陣訓」との余りの隔絶に、その夜はショックで一睡もできない有様であった。

三　「報怨以怨不可」、蔣介石宣言のこと

昭和二〇年八月一五日正午、天皇陛下の重大放送で国民は敗戦を知り、これで戦争は終わったと感じた。だが小生ら軍人には、台湾での俘虜（ふりょ）生活に一抹の不安が残った。街々には「光復」の旗がはためき、小生らは武装解除され、部隊内蟄居（ちっきょ）は当然の事と考えていた。

しかし、全ては杞憂に過ぎなかった。旧日本陸軍の軍律通り、従って階級章もそのまま。外出時、軍刀なしの小生に向かって国府軍の兵隊が挙手の敬礼をする。街角には高くアドバルーンの掲げる文字、「怨（うらみ）に報ゆるに怨を以てす可からず」と読めるからだ。蔣介石は八月一五日、中国本土にて「我々

は決して報復を企図してはならぬ、まして敵国の無辜（むこ）の人民に侮辱を加えるべきではない」と演説したという。

私は心中、儒教の国の人、〝蔣介石万歳〟を繰り返し叫んだ。そして半年後、私は台湾軍にいたお蔭で、恙（つつが）無く日本の杉並区に復員できたわけである。